

## 『地球の裏側の日本』

地球の裏側にあるパラグアイ共和国という国をご存知ですか。

日本には比較的なじみの薄い南米諸国のなかでも、パラグアイは知る人がさらに少ない国かもしれません。日本から時間距離が最も遠い場所にあり(最短でも空路で2回乗り換え、計 35 時間ほどかかります)日本人が求めてやまない3要素、地下資源・観光資源・大消費者市場のいずれもないのですから、日本から訪れる人が少ないのも当然でしょう。

ところがここパラグアイでの日本の存在感は全く逆で、日本では想像がつかないほど大きなものです。その理由ですが、①日本人移住の歴史が比較的新しく、その移住者がこの国の発展に大きく寄与してきたこと、②その間の日本からの幅広い分野での有形無形の援助資産の蓄積、③さらに最近の日本からの企業進出、といった背景があり、この3つは今でもそれぞれが相互に関連して日本のイメージを高めています。

パラグアイは日本より少し広い国土面積を持つ内陸国です。ただ、我々が内陸国と聞いてイメージする閉鎖的な景色とはいささか異なり、全土が広大な平原と丘陵で(最高峰でも 800 メートル程度)、豊富な河川に恵まれ、緑が豊富で明るく開けた穏やかな雰囲気があります。パラグアイ川沿いに広がる首都アスンシオンの街並みはここ数年で様変わりし、しゃれたお店や大規模スーパー、ショッピングセンターが立ち並ぶ賑わい。気候的にも冬場は穏やかで、酷暑とされている夏場でも日々寒暖の差が激しいおかげで冷房のいらぬ日もあります。



(パラグアイ川を望むアスンシオン旧市街)



(新市街のショッピングセンター)

この国への日本人移住者ですが、現在は家族も含めて 5~6000 人程度、150 万人ともいわれるブラジル日系人とは比較にならない少数で、パラグアイ総人口比で 0.1%にも達しません。その移住の歴史も、明治時代からコーヒー農園雇用移民として始まったブラジル移民とは異なり、1936 年コルメナ移住地への5家族の自作農地入

植から始まりまだ80年弱。しかも移住者の大宗は戦後の昭和30年ごろから始まった農業家族集団移住で、まさに同時代の出来事です。現在6か所の移住地と3都市に9つの共同体組織「日本人会」がありますが、各地域内にとどまらず移住地を超えてまとまりが良く、移住者間での縁戚関係が濃いのもこういう事情によります。

もちろん政府による移住事業とはいえ、当初は森林で覆われていた入植予定地を文字通りゼロから開拓し、長く牧畜業しかなかったこの国に大豆、野菜、果物栽培など現在の当国の主要産業である農業を築き上げるのは並大抵の苦勞ではなかったはず（なおパラグアイは小国でありながら今では世界第4位の大豆輸出国です）。このように短い歴史で、無人の森林を立派な農場と街に作り替えてきた日本人の誠実、勤勉、忍耐力に対する信頼感や敬意が、この国での独特の存在感の背景にあり、このことは大統領はじめ当国の誰しもが自然に口にしています。

日本人移住者の業績とともに、受入国側の、開放的で親切で人のよい国民性も移住者を支えてきたといえるでしょう。日本で明治維新を迎えるころ、伯・亜・ウルグアイ3国同盟軍との戦争（1864～70年）に完敗ほぼ壊滅して、領土が半分、総人口も3分の1以下の数十万にまで激減したパラグアイは、先住民グアラニー族との融合を国のアイデンティティーとして明確に位置付け、さらに諸外国からの移民を積極的に受け入れることで再生に向かいます。パラグアイでの通貨単位は「グアラニー」、またグアラニー語も公用語になっていますが、こうした歴史的背景も彼らの感覚の基礎にあると思えます。

戦後移住の当初から日系人社会を引っ張ってきた昭和10年から昭和20年代生まれの人達は、子供の時に親に連れられ2か月かけて移民船でやって来た人たち。その昔神戸の学校にいた筆者も、「あるぜんちな丸」や「ぶらじる丸」が無数のテープに見送られながら神戸港を出港する光景を何度もニュースで見たのを覚えています。その時から始まった人それぞれのかげ離れた人生と、その半世紀後の地球の反対側での再会にはただただ感無量です。



（日本人大豆農園の大型コンバイン）



（イグアス移住地の大鳥居）

農業分野では、保有耕作地が数百ヘクタールを優に超える大規模農業経営者が多数存在し、日本とはケタ違いのスケールですが、一方農業経営の後継者は1人で

あることが多く、多数の子女が都市部に出てきています。そうした人たちは商工業、金融業、医師、弁護士、サービス業(有名レストランも)などの分野で数多く活躍しています。このように、完全にパラグアイ社会の重要な構成員として活動しながら、一方でなんら矛盾なく日本人としての共同体、言語、文化を維持している、このバイカルチャー性が独特な存在感を与えているように思えます。

移住者家族の皆さんとの会話も違和感のない日本人同士の会話です。当初、話し相手の若い人があまりに自然なので、青年協力隊員か派遣専門家だと思って「いつ日本から来たの？」と聞くと、「まだ日本に行ったことはありません。」との回答で面喰うことがありましたが、もう驚かなくなりました。もちろんみな現地学校のスペイン語の授業で育っていますが、移住地ごとに、また全パラグアイ規模で手厚い日本語教育を維持し、さらに各種の文化・スポーツ活動など節々での季節催事を積み重ねてきた結果なのでしょう。

当国の大規模施設の中に、オペラ劇場・会議場・体育館を備えた総合的市民公会堂『パラグアイ日本・人造りセンター(CPJ)』があります。これは今やアスンシオン市の一つの顔になっていますが、それ以外にも、国立大学病院、郊外にある広大な総合保養センターなど、市民になじんだものが随所にあります。これらは日本からの各種支援の成果であり、インフラ・教育・保健・福祉・文化など幅広い分野に及びますが、単に施設建設だけではなく当地で活躍した日本専門家・青年協力隊員の足跡や日本派遣パラグアイ留学生・研修生の人脈といった有形無形の資産的価値、そしてその厚みには改めて驚かされます。



(パラグアイ日本・人造りセンター: CPJ)



(アスンシオン国立大学病院)

日系人社会とは無関係の当国正規の教育機関にも、『日本』を校名に冠したものがああります。幼稚園から大学院まで一環教育の『ニホンガッコウ学院』、中等部と高等部を持つ『日本パラグアイ学院』の2つですが、その課程では、日本語・日本文化も取り入れられ、また公式行事は必ず両国の国歌斉唱・国旗掲揚があり、日本を模範にしようとの方針が明確に打ち出されています。その他、茶道など日本文化が学べる施設も点在しており、その日本文化への親密度には面映ゆい気持ちすら感じることがあります。(ちなみに筆者の住まいの別棟にも茶室もどきを設えて、多くの人にお点前を披露しています。)



(ニホンガッコウ大学卒業式)

(日本パラグアイ学院)

少し経済状況に触れておきます。昨年8月から発足した現政権の閣僚はほぼ全員が政治家経験がなく、他方で国際機関での経験の多いテクノクラート集団。政治家を取り巻く不透明な実態から汚職のイメージが根強いこの国では史上類を見ない顔ぶれです。左派政権から代わった実業界出身の現カルテス政権は外国企業の積極誘致や官民連携事業の促進などの外向きの政策を掲げており、過去数年の好景気・高成長にも支えられて、実体経済の様相がずいぶんと変わりました。これと並行して街の様相も急速に変貌しています。

パラグアイの産業構造はもっぱら農業中心でしたが、折からの近隣諸国でのコスト増や硬直的労働構造から、生産拠点としてのパラグアイに目を向ける企業が増えています。日本企業関係者の来訪も活発で、河川運輸の中核を担うバージ船造船所、近隣国大市場向け自動車部品製造工場などの進出が見られ、現政権も日本関係企業の一層の進出を熱く期待しています。

もちろん進出の可否は企業判断ですが、これまで述べてきたような「日本に対する信頼感や敬意」また当国日本人社会の独特の存在感が一助となることは確実だと思います。日本で『パラグアイは南米一の親日国』と紹介されることがありますが、全世界に多数存在する親日国とはやや質的に異なり、それを超えた次元の異なる独特の感覚の上に成り立っていることを実感しています。

こうしたパラグアイの景色を、『地球の裏側の日本』の方々に知っていただければ幸いです。

(上田善久 2015年1月)